



Skin Surgery 創刊にあたって

日本臨床皮膚外科学会理事長

東 久 志 夫

(大阪赤十字病院形成外科)

医学の診療科で一般標榜科と称されている分野は、ざっと数えて15余りある。各々の科においてさまざまな疾患、病変を研究し診断し治療しているわけであるが、各科においてその時代時代のトピックのテーマ、多くの専門家が着目する主要疾患領域がいくつかあると思われる。例えば、皮膚科においては、さしずめ尋常性乾癬、免疫、アレルギー疾患、アトピー皮膚炎等がそれに相当するのであろうし、形成外科なら、マイクロサージェリーによる皮弁移植、Craniofacial surgery 等が、多くの人々が注目する領域であろうか。芝居の舞台上、最もスポットライトを浴びる分野といえる。

それに対して、シミ、シワ、ホクロを始めとする各種母斑、ニキビアト、小さな皮膚表在腫瘍などの診療は、皮膚科、形成外科いずれの領域よりみても、診断、治療面での対応がいささか等閑視されているきらいがある。しかし、実際のところ、それらの疾患に悩み、治療を求める人々は実に多いという現実がある。

医学の本来の目的は、健全な心身を維持し、生命をいかに救うかという点にあり。しかし、現代においては、より豊かな人間的生活を求めたい、QOLを大切にしたいということが求められつつある。かような観点からみると、これら等閑視されていた疾患により着目し、研究し、より優れた治療法を考案することは、時代の要求にたいする医学界の責務といえよう。

このような時に、JSDS が結成され、さらに“Skin Surgery”という機関紙が生まれることは、誠に意義あることと考える。

“Skin Surgery”という舞台のうえで、皮膚科医、形成外科医、さらに美容外科医が、手をたずさえあって、スポットライトをあびて素敵な劇を演じられるようになるのが私の夢である。